

【沖縄県公文書館】
【Okinawa Prefectural Archives】

Title	「琉球政府関係写真資料」に残された写真家・平良孝七の足跡
Author(s)	豊見山, 和美
Citation	沖縄県公文書館研究紀要 = OKINAWA PREFECTURAL ARCHIVES BULLETIN OF STUDY(15): 9-18
Issue Date	2013-03-30
URL	http://okinawa-repo.lib.u-ryukyu.ac.jp/handle/okinawa/11102
Rights	

沖縄地域学リポジトリ
ORION:Okinawa Repository Integrated Open-Access Network



「琉球政府関係写真資料」に残された写真家・平良孝七の足跡

豊見山 和美十

はじめに

- 1 広報カメラマンとしての半生
- 2 「琉球政府関係写真資料」における平良孝七撮影分の特定
 - 2.1 「琉球政府関係写真資料」
 - 2.2 琉球政府文書にみる当時の広報課
- 3 島々を巡る日々
- 4 表出されたものと隠されたもの - 「パイヌカジ」以降

はじめに

平良孝七（たいら・こうしち）氏（以下すべて敬称略）は、戦後の沖縄を代表する写真家の一人である。1939年(昭和14)沖縄島北部に生まれた平良は、琉球新報写真部、琉球放送テレビ報道部を経て、1970年(昭和45)に琉球政府に採用となり、渉外広報部広報課に配属された。

琉球政府は当時米国の施政権下にあった沖縄住民の自治組織で、1972年(昭和47)5月15日に行われた米国から日本への沖縄施政権返還を機に閉庁し、その業務の多くを日本国の地方公共団体である沖縄県に引き継いだ。平良が琉球政府に入った1970年当時、2年後の日本への返還が確定した沖縄は、さらに大きな時代のうねりのなかにいた。平良はすでに沖縄の過酷な現実を訴える写真家として活動しており（政府入りして半年後の9月には、平良がフリーランスの時期に撮った写真を主とした沖縄革新共闘会議編「写真集沖縄 百万県民の苦悩と抵抗」が新時代社から出版された）、彼には1968年(昭和43)に誕生した公選主席による「革新」施政を記録する役割が求められていたことだろう。いわゆる広報カメラマンの仕事とは通常は役所のイベントを撮影するに尽きるものだが、軍事基地の重圧と矛盾を背負って日米両政府と向き合う宿命にあった琉球政府にあっては、広報カメラマンもまた常に歴史と社会を意識する特別な使命を帯びた。

平良が撮ったものを含む一群の広報写真は、沖縄県総務部知事公室(当時)広報課が引き継いで長く保管していたが、1998年(平成10)、歴史的価値を有する資料として、沖縄県の文書規程等に基づいて沖縄県公文書館に引き渡された。沖縄県公文書館はこれらの写真群から日本復帰以前に撮影された分を「琉球政府関係写真資料」として整理して2003年(平成15)から利用に供しており、およそ4万1,000枚をホームページの画像検索データベース「写真が語る沖縄」でも公開している。この中には、木村伊兵衛写真賞を受賞したプロフェッショナルな写真家である平良が公務として撮った写真が多く含まれている。

本稿は、「琉球政府関係写真資料」のうち平良撮影分を特定し、写真家としての平良のキャリアに、琉球政府および沖縄県職員としての24年間の撮影活動を位置づける試みである。戦後沖縄を代表する

ひとりの表現者の軌跡を再確認するとともに、芸術表現とは無縁に思われる公文書資料のなかに紛れ込んだその作品世界を示してみたい。併せて、沖縄県公文書館が所蔵する琉球政府総務局広報課文書も参照する。

1 広報カメラマンとしての半生

平良は1939年(昭和14)10月17日、沖縄県国頭郡大宜味村喜如嘉に生まれた。大宜味村は沖縄でいうところの「やんばる」の典型的な風土の村だ。ゆるやかな大海と深い山々に抱かれた自然豊かな地域であるとともに、政治的な意識の強い土地柄でも知られる。生年である1939年には第二次世界大戦が勃発し、平良は沖縄で行われた日米の戦闘を5歳の時に体験した。戦争は3人の兄の命を奪い、「幼かった私の枕元で、母は、息子たちが帰ってくるのを待って、哀しくうたを口ずさんでいた。それが私の反戦思想にもつながっている¹」という幼少期を過ごし、高校生のときにはすでに、米軍の弾圧に抵抗する革新勢力を公然と応援する熱血ぶりを示すいっぽう、小説を書いたりする文学青年でもあったという。カメラへの興味も子供のころから強かったらしい。平良の経歴その他を概略すると以下のとおりである²。

1958年(昭33)	辺土名高校を卒業。国頭村辺土名の写真館を手伝う。 上京しアルバイトを転々とするうちに写真工房で写真技術を会得
1962年(昭37)	沖縄に戻って辺土名でDPE店を開業 のち琉球新報写真部員、琉球放送テレビ報道部を経てフリーランス
1969年(昭44)	全軍労働争いに取材した組写真で「沖展」奨励賞受賞
1970年(昭45)	2月 琉球政府に採用。総務局渉外広報部広報課広報係(2級一般事務職) 9月 平良らの写真を収録した沖縄革新共闘会議編「写真集沖縄 百万県民の苦悩と抵抗」が新時代から刊行
1972年(昭47)	3月17日～19日 第1回平良孝七写真展(那覇・琉球新報ロビー) 5月 琉球政府閉庁に伴い、沖縄県職員となる。
1973年(昭48)	11月19日～21日 第2回平良孝七写真展(那覇・琉球新報第2ホール)
1976年(昭51)	「平良孝七写真集 パイヌカジ〈記録1970年～1975年〉」を自費出版
1977年(昭52)	5月 第2回木村伊兵衛写真賞を受賞
1979年(昭54)	広報課から開発局水資源開発班に異動(主査)
1982年(昭57)	1月 「平良孝七写真集1961年～1981年 沖縄カンカラ三線」を三一書房から刊行。 この頃から大宜味村塩屋の民俗行事ウンガミを撮影。
1985年(昭60)	開発局からコザ渉外労務管理事務所福祉第一係に異動(主査)
1986年(昭61)	8月 写真を担当した「塩屋・ウンガミ - 沖縄県大宜味村塩屋ウンガミの記録」が塩屋ウンガミ刊行委員会から刊行
1987年(昭62)	2月 写真を担当した「くだものばたけ9パイナップル」(文・ちかみじゅんこ)が金の星社から刊行

¹ 「平良孝七写真集1961年～1981年 沖縄カンカラ三線」あとがきより 1982年 三一書房

² 平良の生い立ちや青年期については、平良本人による講演録『沖縄にこだわるということ - ぼくと写真との係りの中で -』(「フォト真」No.9所収 昭和53年10月 比嘉康助発行)のほか、1972年当時に東松照明が「アサヒカメラ」で連載した「沖縄通信」(「朱もどろの華 沖縄日記」所収 昭和51年 三省堂)に記述がある。本稿はこの他『沖縄写真史年表』(「写真0年沖縄」所収 2007年 Ricochet)を参考にした。職員としての履歴は琉球政府および沖縄県刊行の各職員録による。

1992年(平4)	4月 知事公室広報課に異動（主幹） 5月 「復帰」20周年記念事業「写真で考える沖縄戦後史展」に出展（沖縄県他主催・県内各地を巡回）
1993年(平5)	20万点に上る写真資料を名護市に寄贈 5月 写真展「平良孝七の世界」（名護市民会館）
1994年(平6)	1月 死去。享年55歳
1995年(平7)	9月 平良孝七回顧写真展（那覇・リウボウホール）
2002年(平14)	7月「沖縄を見続けた写真家；平良孝七の世界」（平良孝七写真展実行委員会主催・名護市民会館、8月大宜味農村改善センターで巡回展）。同委員会編「太陽と風とカンカラ三線 沖縄を見続けた写真家 平良孝七の世界」刊行

1977年に第2回木村伊兵衛写真賞を受賞したことは、平良の写真家としての名声を一気に高めた。付言するまでもないが、朝日新聞社が主催するこの賞は、写真の制作、発表活動において優れた成果をあげた新人に贈られるもので、写真界の芥川賞とも称される知名度と権威を誇る。受賞作「パイヌカジ」に収録された写真は、すべて1970年（琉球政府広報カメラマンになった年）以降に撮影されたものだった。県内は平良の栄えある受賞に沸き、6月には平良幸市沖縄県知事が朝日新聞沖縄支局長とともに発起人となって盛大な祝賀会を那覇市内ゆうな荘で催すなど、彼に対する期待の大きさがうかがわれる。当時の沖縄で発行されていた写真雑誌のコラムは受賞作を「沖縄先島に於ける人々の土に根ざした営みが、審美的感覚から脱却したリアルな手法でとらえられている」と評した³。

とはいえ平良はフリーランスのカメラマンではなく、一職員として広報公聴用写真撮影を担当するのが日常の基盤だった。自分のテーマを自由に追いかけるには時間的な制約が大きかったと思われるなかで平良が世に出した作品とはどんなものだったのか。

後述するように琉球政府の広報カメラマンとは相当にタフな業務だった。琉球政府は管内の多くの離島へき地で出張業務があったし、屋良革新県政は広報公聴に力を入れて住民の啓蒙とコミュニケーションに努めたため、カメラマンもまた東奔西走だった。交通事情の不便な当時、遠隔取材地への行き来は現在よりも時間を要し、撮影して戻ってくれば暗室での現像作業が待っていた。だが、平良が写真家として豊饒な実りを得たのは、むしろこのハードワークの日々においてだったと考える。広報カメラマン業務は彼に、沖縄本島より南の島々と出会う契機を与えたのである⁴。

たいていの沖縄の人間は自分の育った島以外の島に関心が少ないと言える。離島出身者は就職や進学または都市の遊興を求めるために「沖縄」または「那覇」へと出ていくけれども、それは必要に迫られただけのことだろう。同様に、沖縄本島出身者が実利以外の目的で、たとえば宮古諸島、八重山

³ 「フォト真」No.7所収『盛大に祝賀会』1977年7月 比嘉康助発行

⁴ 仲里効は、日本復帰後の現実に喪失感を抱いた平良にとって「『自分を見つける』ことが『島巡り』と重なり、〈むなしさ〉は「表の闘争」から「島」へとまなざしを返す逆接のエネルギーとなって写真家の背中をおす」といい、再生の道として自覚的に〈島〉を発見したとする（『パイの風の共和国 平良孝七』「フォトネシア 眼の回帰線・沖縄」所収 2009年 未来社）。しかし筆者は平良の南の島々との出会いはむしろ偶発的・受動的なものだったと推論する。平良の立場で、休暇を利用した撮影旅行のために何度も交通事情の悪い離島へ出向くことは難しかっただろうし、実際、本稿3でみるように「パイヌカジ」の収録写真の撮影時期は多くが出張のタイミングと重なる（もちろん、たとえ偶発的な邂逅ではあっても、平良がそこに撮るべきものを見出し深く没入した事実は変わらない）。この点については1970年以前の平良の先島体験の有無を確認する必要があるが、今後の課題としたい。ともあれ平良が、軍事権力に抑圧されあるいは抵抗し闘う人々でなく、孤島の風土をとらえた作品を発表するに至った要因として、日本復帰の幻滅や失望感、挫折感を過剰に後付けすることには懸念を抱く。

諸島に出向くことは多くない。沖縄本島北部出身の平良は、広報課職員として訪れた南の島々に、写真家としての彼の本能を強く魅きつける「現場」を見いだした。ことに、先島諸島と総称される宮古八重山のなお果ての島々、多良間島や黒島、与那国島は、写真家・平良孝七にとってまさに運命の地であったようだ。

平良が1970年から1975年の間に撮ったこれらの島々の写真で編んだ「パイヌカジ」を自費出版したのは1976年である。「南風」を意味するタイトルのこの写真集には、1970年刊の「沖縄・百万県民の苦悩と抵抗」にみるような「米軍権力との闘い」や「日本政府への訴え」といった画像はない。コントラストの強い画面は変わらないが、「パイヌカジ」でのそれは光と対の深い陰翳に彩られた島々の空気を凝縮したものとなっている。平良のカメラは、島に生きる人々の表情や姿にまで深く刻み込まれた光と影をとらえる。それは干ばつや台風といった自然の脅威になぎ倒され、現代社会がもたらす不平等に起因する貧困のなかで生きるがゆえの沖縄の人々の翳りなのだという解説もできるだろう(平良自身、これらの写真に「島々の土に愛着を覚え、生活を私なりに記録し、訴え、為政者や、都市に住む人たちが忘れていた島々の実情をこの写真によって、心を動かされる人がいるならば、もしや「役立つ」ものになりはしないかと…」というメッセージを付した)⁵。

しかしこの作品世界には、そのような理由づけさえも超越した何ごとかが、いわば人間存在の無条件さというものが提示されているように思う。写真を媒介として被写体と向き合う者は、自身の存在の根拠を問い返される。このような根源的な応答を生み出す稀有な写真群に対して、木村伊兵衛写真賞が贈られたのだった。

2 「琉球政府関係写真資料」における平良孝七撮影分の特定

2.1 「琉球政府関係写真資料」

徹底的に沖縄にこだわると明言し、沖縄だけを撮り続けた写真家だった平良は、彼が広報課の一職員として撮影した写真を沖縄県という組織に残す巡り合せになった。琉球政府期の広報写真は沖縄県が引き継ぎ、さらに沖縄県公文書館に引き渡されて広く利用に供されていることは冒頭に述べたとおりである。公文書館が「琉球政府関係写真資料」としてシリーズ化したこれら一群の写真資料の内容は多岐にわたる。戦後史年表に書き込まれるような重大な場面の記録はもちろん、琉球政府の諸活動や職員の様子、克明に撮られた地域の風景や住民の表情の量も豊富に、ユニークなアーカイブを構成している⁶。

広報カメラマンが撮影した写真は、その目的からして当然のことだが、「沖縄のあゆみ」や「みんなの県政」といった県民向け情報誌⁷や、「かべ写真」「県政画報」のようなポスター形式の印刷物に使用するほか、庁内の掲示板やロビー特設会場でしばしば開催する県政写真展で展示するなどして、多くの住民の眼にふれるものだった。

この中に存在する平良の撮影分は現在、表現者の「作品」としてではなく、公文書館制度のもとで公務の成果物という共有の知的あるいは文化的資源と位置づけられているわけだが、20万以上のカッ

⁵ 第2回平良孝七写真展リーフレットより 1973年11月

⁶ 沖縄県公文書館ホームページで提供している画像検索データベース「写真が語る沖縄」には、「琉球政府関係写真資料」と併せて「米国収集写真」2万1千枚を収録しており、米軍側の広報カメラマンの手になる写真もまとめて検索・閲覧できる。時に同じ場面や人物を撮影していてもイメージの質感が異なるのは、文化的な要因もさることながら、沖縄と米国間に存在する否定できない非対称性 - 占領者と被占領者として - のゆえだろうか。

⁷ 「広報公聴の手びき(総括編)」(沖縄県企画調整部広報課発行 昭和49年)によれば、広報誌の発行部数は昭和50年には1万部だった。

トを撮影しながら自己の単独名義では生涯に2冊の写真集しか出さなかったこの写真家は、そのことを生前予想していただろうか。ウェブ上で各地からアクセスされうる画像データベースは図らずも、平良の公開されたアーカイブでもあるのかもしれない。画像検索データベース「写真が語る沖縄」で利用者が選んだ写真は(もちろん平良のものには限らないが)、出版物への掲載、放送番組や映像作品での援用など多様な形で使用されている。

沖縄県公文書館では沖縄県の広報課が保管していた琉球政府期のネガを300dpiでデジタルデータ化している。ただしホームページの画像データベースに登載したものは、ユーザビリティの向上(たとえばウェブ上の解像度で表示されるまでの時間を短縮するといった点)を優先したため、残念ながら高品質な画像とはなっていない。館内の閲覧室では、デジタルデータから印画紙にプリントしたハードコピーをアルバムに収納して配架してあり、特別な手続きなしで自由に手に取って閲覧し複写することができる。また、デジタルデータそのもののコピーも可能である(以下文中の写真はすべて「琉球政府関係写真資料」より。6桁数字は写真番号)。



035876 久米島 1970年3月
移動県民室の「フォートニュース」展示



036379 撮影地不明 1970年
売店に掲示された「かべ写真」

2. 2 琉球政府文書にみる当時の広報課

では、4万1,000枚の琉球政府関係写真資料のうち、どれが平良の撮影になるものか。琉球政府関係写真資料のカバー年代は1950年代から1972年の復帰の年までで、平良が広報課に所属した1970年2月以降の撮影分としてはここからおおよそ9,000カットを括り出すことができる(これは撮影日情報がいまいちなものを除いた数である。精査すればさらに増える見込みはあるが、現時点で確定できる情報に基づいてカウントした)⁸。

この時期の広報カメラマンが平良だけとすれば、9,000カット全部が彼によるものという確率は高くなる。当時の職員構成を確認するために職員録を調べると、平良が広報課に入った年および前後の職員録は見つけれなかった。琉球政府行政府人事課は全職員を掲載した職員録を毎年出していたわけではないようで、1970年2月に近い日付のものは1968年2月15日現在と、1972年2月現在の2冊しかない⁹。1968年2月15日現在の職員録には広報課に森幸次郎(沖縄ニッコールクラブの会員でのちに沖縄

⁸ 沖縄県公文書館ホームページの写真資料検索データベース「写真が語る沖縄」では、撮影年による検索が可能である(画像によっては、さらに月日まで特定していることもある)。

⁹ 存在が確認できる琉球政府職員録は1953年5月末日現在、1958年10月1日現在、1964年5月1日月現在、1968年2月15日現在、1972年2月現在の5冊。刊行物を欠く時点の職員構成を知りたいければ、各課や各部の文書として作成された職員名簿等にあたることになる。ちなみに森の前には1964年5月1日現在で瀬底正昭が非常勤職員として勤務していた。琉球政府の広報係には、写真撮影の専門家を充てていたことがわかる。

写真連盟会長)の名があり、写真技術に長けていた森は広報カメラマンを務めていた¹⁰。森の職は1972年2月現在の職員録で労働局渉外労働課離職対策係主査、同年11月付発行の沖縄県職員録で那覇労務管理事務所福祉課離職対策係長に変わっており、直前の1972年1月まで広報課にいたことも十分考えられる。しかし森の押印が琉球政府広報課文書の起案や供覧文書で確認されるのは1971年6月が最後だから¹¹、森の渉外労働課への異動は1971年7月1日付けだったと見られる。広報課に2人の写真家がいた期間は1970年2月から1971年6月末までの17か月ということになり、この間に撮影された広報写真のうちどれが森でどれが平良かという配分の問題が生じる。

だが、広報課文書によれば1970年2月の森は広報課の中でも公聴係であり、県民の要望や依頼に対応する業務の担当だった。公聴係は政府への要望陳情だけでなく人探しから近隣とのトラブル相談まで、なかなか守備範囲が広く事務量も多かったと見受けられる¹²。日数を要する離島での広報公聴行事の企画書などをみると、公聴係の森は、先発隊の広報係平良らとは遅れて合流するのが通例だったようである¹³。このことからしても撮影業務はもっぱら平良が行ったと推測してよいだろう。

実は広報係にはカメラに親しむ職員がもう1人いた。広報課の雑文書綴りに「第23回沖展入賞・入選者名簿(政府公務員)」という印刷されたりストが含まれており、一芸に秀でた政府職員の氏名と現職が一覧で確認できる。写真の部では広報課所属職員として森(準会員賞)の他に、勢理客清器(入選)がいる¹⁴。もっとも勢理客は1968年には既に広報課にいたが¹⁵、その職は琉球政府が採用していた職階制における一級自動車運転手職だったので、写真技術はあっても公式撮影を担当するのは本務ではなかった。

これらの状況から、「琉球政府関係写真資料」のうち撮影日が1970年2月以降のものはほぼ平良の撮影分と見てよいと考える(ただし出張撮影が重なる場合等には写真の心得のある者が代役を務めることがあったかもしれないので1枚残らずということとはできない)¹⁶。また、東京や尖閣での写真は現地に平良が同行したと断定できる材料がないので除いたうえで、9,000カットという数字を示しておく。

3 島々を巡る日々

この9,000カットの内訳からは、かなりの数をいわゆる離島へき地で撮影したことがわかる。平良の採用当時の広報課業務の一端を見てみよう¹⁷。1970年の広報課は「文化キャラバン」として離島へき地に出張政府サービスを提供するイベントが一巡したことに伴い、新たに「移動県民室」と銘打った新しいサイクルをスタートするところだった。平良は採用から5日後の2月6日から9日にかけて与那国町で開催の移動県民室のためにさっそく出張した。このイベントは行政主席の行政報告会と地方行

¹⁰ 「森幸次郎写真集 沖縄の伝統工芸をささえる人達」 昭和61年 自家本 153頁

¹¹ 琉球政府文書「公聴・広報に関する書類1971年01月～12月 県民室」沖縄県公文書館資料コードR00001454B。琉球政府の場合、会計年度が米国と同じく7月1日始まりの6月30日終わりだったことから、人事異動も同じタイミングで行われることが多かった。

¹² 琉球政府文書「公聴・広報に関する書類1969～1971年」沖縄県公文書館資料コードR00001381B

¹³ 琉球政府文書「公聴・広報に関する書類 移動県民室関係1970年」沖縄県公文書館資料コードR00001426B

¹⁴ 琉球政府文書「庶務に関する書類1971年」沖縄県公文書館資料コードR00001471B

¹⁵ 1972年11月の沖縄県職員録では広報課を離れている。

¹⁶ 1972年以降1975年までの間も、広報カメラマンは平良だけだったと見られるが、広報課に伊波久雄が転入してきた昭和52年には撮影の分担が始まったらしい。伊波は岩波映画社に勤めた経歴がありムービーのキャリアを積んだ人物だった。当時広報課にいた元職員に聞き取ると、どちらかといえば政府内の定型的な記念撮影に類するものは伊波が、外に出向くものは平良が、というような約束事があったという。平良が開発局へ異動した後は伊波が広報課に残った。

¹⁷ 注13前掲。1年間の移動県民室業務をこのようにきっちりファイリングした簿冊の残存数は乏しく、1971年と1972年の状況がわかる資料はない。

政視察をジョイントした大がかりなものとなった。移動県民室は2月28日から3月1日の伊是名村、3月5日から7日の久米島（具志川村、仲里村）と続き、平良は採用直後から島々を巡った。

与那国島のように離島だけで一つの自治体（この場合与那国町）を成す地域を「離島町村」と呼んだが、離島町村の自治体財政の貧しさと遠隔地ゆえの生活文化水準の低さ（と認識されていた）という沖縄内での格差是正は、琉球政府の大きな課題のひとつだった。出張政府サービスは広報課所管の重要な広報公聴事業として3年間で三町十村を巡回するペースで実施され、平良が離島へき地を訪れる機会は広報課のプロパー業務としてはこれが該当する。加えて行政主席や日本政府高官などの行政視察に同行するほか（台風や干ばつの際には被害状況視察がセットされた）、無医地区の支援のために厚生局が所管する地域巡回診療事業の取材も要請された。地域巡回診療は歯科一般併せて1970年には12地区、71年には9地区、72年には18地区で実施されている。この事業もまた平良が南の島へ出向く機会となった。公務の合間または前後の時間（平良は早朝や夕暮れ間際の光を好む写真家でもあった）、政府支給の公務用ではなく自分のカメラを手にして島を歩く平良の姿が、残された広報写真の背後に見えてくるようだ。



037490 渡嘉敷村 1970年10月 移動県民室の会場入口



035251 与那国町 1970年2月 行政主席学校訪問



040202 西表島1972年3月
地域巡回診療



039494 石垣島1971年9月
台風被害視察



035173 与那国島 1970年2月
移動県民室開催時

さて、ここまでの推論を踏まえ、写真集「パイヌカジ」収録写真撮影時と、平良が従事した広報業務の時期を照合し、琉球政府関係写真資料のうち平良撮影分特定の精度をさらに上げてみたい。「パイヌカジ」収録写真の撮影時と公務出張の時期が合致すれば、琉球政府関係写真資料の当該部分は平良の撮影分としてより絞り込むことができる。写真とはそれを撮影した者がいつどこにいたかを克明に証言しうるメディアで、なお幸いなことに「パイヌカジ」は、すべての収録写真に撮影年月と場所の記述がある。次表は、「パイヌカジ」収録全132枚のなかで1972年以前の撮影分44枚の内訳と、それぞれの撮影月に近接する広報課の取材活動事項の対照表である。

撮影年月	撮影地	収録点数	広報課の取材活動事項（広報写真残存状況等）
1970年6月	与那国島	1	6月21日～23日 山中貞則総務庁長官、八重山視察（与那国島も）
1971年6月	与那国島 黒島	3 2	6月30日 屋良朝苗行政主席宮古八重山視察出発し、同日黒島で学校訪問。関連写真約100枚。
1971年9月	石垣島	3	9月26日 屋良行政主席、干ばつ・台風被害視察のため石垣入り。関連写真約60枚。
1972年3月	西表島 竹富島 波照間島	3 1 1	3月4日 西表青年訓練センター落成式 関連写真約35枚。 3月16日 石垣市で巡回診察ヘリコプター運航記念式典 関連写真約50枚。 3月12日 西表島・波照間島で地域巡回診療 関連写真約140枚。
1972年7月	多良間島	11	地域巡回診療が7月でなく6月に実施されている ¹⁸ 。
1972年8月	小浜島 黒島 池間島 多良間島	2 2 2 1	8月28日～29日 黒島および小浜島で地域巡回診療 関連写真190枚。 関連写真確認できず。 上空からの撮影 ¹⁹
1972年9月	渡名喜島 小浜島	3 3	9月に保健婦の活動を渡名喜島、西表島、石垣島で撮影した広報写真約270枚が残っている。
1972年10月	黒島	6	関連写真確認できず ²⁰ 。

撮影年月と広報課業務の符号からして、「パイヌカジ」収録写真は広報課業務出張の機に多くが撮影された蓋然性が高いと言えるだろう。1972年以降については、沖縄県公文書館で保管している広報課引渡し写真が未公開なため、「パイヌカジ」収録の1973年～1975年分との照合ができないが、広報課が取材したであろう重要な事項と「パイヌカジ」収録写真の撮影年月のリンクのいくつかを、今のところ次のとおり示すことはできる。

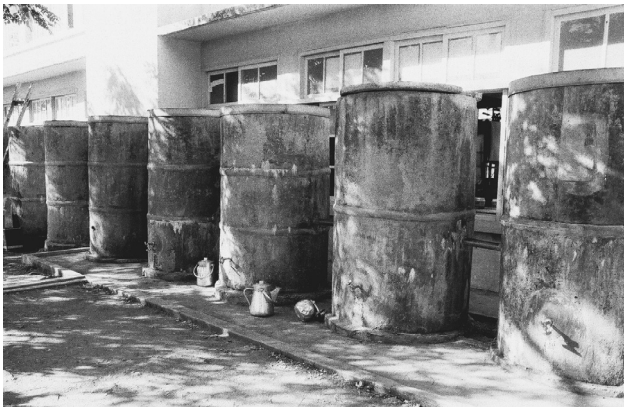
撮影年月	撮影地	収録点数	広報課の取材活動事項
1973年4月	波照間島	6	24日 若夏国体の炬火採火

¹⁸ 本稿3で述べたように、地域巡回診療は広報課のレギュラーな取材事項だったので1972年6月の多良間島巡回診療も撮影されたと思われるが、これらは今のところ確認できない。巡回診療に限らず、琉球政府関係写真資料には多良間島で撮られたものは欠落しているようである。

¹⁹ 八重山への往復の機内から撮影されたものと思われる。

²⁰ 黒島のものに限らず1972年10月撮影分は琉球政府関係写真資料から欠落している。

1974年5月	黒島	7	5月23～26日 波照間島・黒島で移動県政相談
1974年7月	与那国島	7	7月17～18日 与那国島で移動県政相談
1974年8月	多良間島 水納島	3 3	8月12～13日 多良間村で移動県政相談
1975年2月	黒島	3	2月22日 山中貞則初代沖縄開発庁長官、黒島で海底送水管開通式並びに記念碑除幕式、名誉町民推挙式等のため石垣入り
1975年10月	西表島	2	10月13～19日 西表島西部、鳩間島で巡回診療
1975年11月	伊良部島 多良間島	1 5	10月29日～11月1日 大神島で巡回診療



038585 黒島 1971年6月干ばつ被害視察



053995 南大東島 1970年 移動県民室時か



041731 西表島 1972年9月 戸別訪問する保健婦



040963 石垣島が黒島 1972年7月 森林

ところで、9,000カットのなかには「パイヌカジ」に収録されていない島々、たとえば伊是名島、伊平屋島、久米島、大東島、座間味島、久高島で撮影されたものもある。国頭・名護をはじめとしたやんばるでの撮影分（1970年8月撮影の上本部村具志堅のシヌグ、国頭村比地と大宜味村塩屋のウンガミなどの民俗行事も含む）も残っている。この他、被写体への関心がとりわけ感じられるサブジェクトとしては、たとえば1971年1月と7月～9月に実施された毒ガス移送の記録は約600枚、1972年5月15日の日本復帰の日に撮られた約110枚を挙げてみたい。どれも沖縄の戦後史に特筆されるべきことである。また、これとは違う視点がうかがえるのが、離島へき地勤務の保健婦たちを撮った約270枚と、八重山ややんばるの森林を撮った約480枚である。医療設備も医療従事者もない無医地区で、住民の健康を守るという使命感に満ちて働く保健婦たち。島へ向かう船上で潮風に吹かれ、農家の軽ト

ラックの荷台に揺られ、荒れ地の一軒家を訪ね歩く彼女たちを丁寧に撮るいっぽう、軍事演習や開発にさらされながら静かに息づく沖縄の森林やそこで働く人々のすがたも多く記録されている。聖なるものへ向ける撮影者の愛情と畏敬の念が伝わるようである。

4 表出されたものと隠されたもの - 「パイヌカジ」以降

木村伊兵衛写真賞受賞から2年後の1979年(昭和54)、平良は開発局水資源開発班に異動した。9年間の広報課勤務の区切りは、沖縄の戦後史のひとつのエポックと軌を一にしていた。1968年(昭和43)に屋良朝苗が初の公選行政主席に当選して以降、日本復帰をはさんで10年の「革新県政」が続いたが、屋良路線の後継者だった平良幸市知事が病気のため任期途中で辞任した。これに伴って1978年(昭和53)12月に行われた県知事選挙で西銘順治が当選し、4期12年に及ぶ保守県政が始まりを告げた。県政路線の転換と同時期に、革新県政を撮り続けてきた平良は広報カメラマンの任を解かれた。

開発局勤務中の1982年(昭和57)1月、平良は東京の三一書房から「平良孝七写真集1961年～1981年 沖縄カンカラ三線」を上梓した(編集レイアウトは小橋川共男が担当)。1985年(昭和60)にコザ渉外労務管理事務所福祉係に異動し、その前後4年ほどは故郷大宜味村に請われ、村内塩屋集落で行われる民俗行事ウンガミを撮影した。その成果は「塩屋・ウンガミ - 沖縄県大宜味村塩屋ウンガミの記録」(塩屋ウンガミ刊行委員会刊)に結実して1986年8月に刊行されている。

1992年(平成4)、平良は13年ぶりに知事公室広報課へ主幹として戻る。県政は1990年(平成2)12月から大田昌秀知事の革新県政へと移っていた。しかし体調に異変を来していた平良にかつてのエネルギーはなく、1993年(平成5)には何かを振り切るように20万点に上る自らの写真資料を名護市に寄贈し、1994年(平成6)1月に54歳で他界した。平良はその翌年から始まった復帰後最大と言われる反基地運動の高揚を目撃することはできなかった。

1982年刊の「カンカラ三線」に収録されたのは1961年から1981年にかけて撮影された94点の写真と、戦後沖縄を代表する各界の人物51人のポートレートである。このうち「パイヌカジ」から再録した写真は20点、新たに加えた離島の写真はわずかに4点、驚くことには、離島の写真の撮影年は1975年が最後だった。それは平良が1975年以降、かつてあれほど魅了された南の島々を撮らなくなったことを示しているのか？それとも撮ってはいしたが公にすることを選ばなかっただけで、1975年以降の南の島々のネガは最晩年に名護市に寄贈した20万カットの資料の中に眠っているのだろうか？または平良は全部を沖縄県広報課のキャビネットに残していったのか？

平良が生前に作品として公表した写真は、1,000点に満たない。それは撮りためた20万カットのわずか0.5パーセントの表出である。表出されたものと世に隠されたもの、写真家の名を冠したものと冠しなかったもの。写真家自身が公表したものだけでは、写真家の世界観は結局わからないのかもしれない。表出するためにではなく、見たものをただ蓄積する。写真家とは、人間がアーカイブする存在であることを根源的な形で示すプロフェッションなのだろうか。

「『土着の心』で沖縄の記録を撮り続けたい」²¹と書いた平良は、その全記録を他者に引き継いで生涯を閉じた。撮られた沖縄が、写真家の「作品」であることを超えて、沖縄そのものの記憶としていつか呼び戻される日への彼の祈りを、そこに聞くように思う。

²¹ 前掲「カンカラ三線」あとがき より